

朝鮮学校における「民族」の形成

—— A 朝鮮中高級学校での参与観察から ——

山 本 かほり

1. 問題の所在

本稿は2011年度から行っているA朝鮮中高級学校（A中高）での調査の初期報告である。朝鮮学校については、「保守的」だと言われる言論を中心に批判の対象となっている。それは、後述するが朝鮮学校と在日本朝鮮人総聯合会（総聯）と朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）との関係を強く批判するものである。反対に朝鮮学校を「弁護」するような立場の言論は、近年の朝鮮学校の「変化」を主張する。すなわち、朝鮮学校が従来から持っていた政治的な立場から脱却しつつあり、「開かれた学校」になりつつあるというものである。しかし、その実態は十分には知られていない。私自身もこれまで研究を通じて、朝鮮学校出身者にインタビューをしたことがあるが、朝鮮学校で受けた教育が個人の人生にとって与える意味を考えたことはなかった。

ところが、2010年4月に始まった「高校無償化」制度から朝鮮高級学校（朝高）だけが排除されたという問題を契機に頻繁に朝鮮学校に足を運ぶようになった。そして、そこで出会う朝鮮高級学校生（朝高生）たちの（少しも学問的な表現ではないが）「明るさ」にひかれるようになった。宋基燦も『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティポリティクス』（2012）のプロローグで、やはり「明るさ」という言葉を使って朝鮮学校の生徒について述べている。私が感じる「明るさ」と宋基燦が感じた朝鮮学校の生徒たちの笑顔にある「明るさ」は、その解釈には差があっても、おそらく同じ質のものであろう。

私自身、メディアに何らかの影響を受け「困難な状

況下にある朝鮮学校」というイメージにとらわれていたせいか、朝高生たちがもつ「明るさ」は意外なものであった。朝鮮学校の運営は困難で、教職員の給料も十分に支払われない。学校の施設は決して良好とは言えない。それでも、生徒たちは「学校が大好き」「朝鮮学校を守り続けたい」と実に明るく語る。もちろん、学校の公式見解を繰り返しているだけと見なすことも可能であるが、私にはそれだけでは説明できない「熱い思い」が感じられた。この「熱さ」の正体は何だろうか？ かれらの「明るさ」の中身は何だろうかという素朴な問いの答えを探すことから本研究をはじめ必要があるように思うようになった。

これらの問いに考えをめぐらせていたとき、民族関係研究会（以下関係研で行った「在日韓国朝鮮人の家族親族単位の世代間生活史調査」¹⁾で私が深く関わったX家のメンバーの生活史を思い出した。

X家は3世代の多くが高学歴を取得し、医師をはじめとする専門職に就いていることを特色とする親族である。しかし、X家に調査を依頼した理由は、X家のメンバーの多くが朝鮮籍で、総聯との関係をもち、さらに3世の何名かが朝鮮学校への通学を経験していたことにあった。それまで調査対象となっていた3親族はほとんどが韓国籍で、日本学校での教育を受けていた。対象者の多くが、在日韓国・朝鮮人として、少し「屈折」した生活史を語っていた。つまり、日本社会に存在する在日韓国・朝鮮人に対する差別が理由で、悩み、苦しんだというものだ。

それに比べて、総聯に近い家族・親族の中での子育てや子どもの成長のあり方は、韓国籍の人々と比較して何か異なっているだろうか？ また、かれらの民族

関係の様相はどのようなものだろうか？ 朝鮮学校の経験が個人の人生にとって意味は何だろうか？ そんなことを明らかにしようと、X家に調査を依頼したと記憶している。しかしながら、調査では、2世代（自営業）から3世代の世代間の社会移動に関心が集中し、そんな視点は落ちてしまった。したがって『民族関係の結合と分離』においては、それを可能にした要因を分析することのみに力を注いだ。

しかしながら、朝高生たちの「楽しそうな」姿を目にしなが、関係研での分析時には関心を払わなかったX家のメンバーの語りを思い出すようになった。たとえば、高校までを朝鮮学校に通い、その後、1浪して公立医大に進み、現在は産婦人科医として働くX4（女性・1964年生）さんの浪人時代のエピソード。

「(予備校時代に) 後輩が(朝高の制服のチマチョゴリを着て) 通っていくのを遠目にみてね、無性に懐かしくて、着たくなったのよ。なんか、予備校に行って、勉強も全然ついていけないし、“この先、大丈夫かな” って思ってたね。心の拠り所が欲しくて。母に“制服のチョゴリ、着ようかな” って。母には、なんか変だと思われたけど、私、大マジやったんですけどね。」(関係研・X4)

さらに(当時独身だったX4さんに)「この先結婚して、子どもができたなら、その教育をどうするか？」と尋ねたら、それまで、きっぱりとした口調で語り続けていた彼女が、少し迷いながら、小声で「……私はねえ……でも、やっぱり(朝鮮学校に) 行かせるかなあ」と答えたことなどを思い出したのだ。(X4さんはその後結婚。子どもは日本学校に通学させている。)

また、X4の弟X15さん(1969年生)は中学まで朝鮮学校に通い、公立高校から1浪後、国立大学医学部を卒業し、現在はペインクリニック(麻酔科)の医師として働いている。彼は高校から日本学校に進学した理由は「成績もよかったので、人と違うことをしよう」というものだった。中学時代から塾に通い、校区ではトップの進学校に進学している。しかし、彼は高校時代一人悩んだという。

「(朝鮮学校から日本の学校に入って) それまで育った環境と違うところに放り込まれて、いきなり、日本人と同じ机並べて勉強せえとか、違和感がありすぎたんですね。だから、(朝鮮学校から) 日本の高校へ行くのがええことやとは、必ずしも思っ

た、日本の高校へ行って、ものすごい孤独感を感じましたからね。そして、自分が朝鮮人であることが恥ずかしかった。それまでは、(朝鮮学校の生徒が) 喧嘩が強いというのが、ある意味で正のイメージやったものが、逆転するわけ。(それまでは日本人と喧嘩して勝ったという話を聞いて、良しと思っていたのだが) なんと恥ずかしいことをやってるんや(と思うようになった)。朝鮮学校行ってたというのが、積極的に言えなかったですね。」(関係研・X15)

このように語る一方で、朝鮮学校時代の友人に対する思いも語る。

「朝鮮学校の友だちに会いたくなって……電話して会うたりとかはしてました。友だちからいろいろ話して聞いて、“そっちも楽しそうやなあ” と思ったこと、ありますよ。」(関係研・X15)

当時は、この語りが持つ意味を理解しようとしなかった。当時のスクリプトを読み直すと、インタビュアーである私たちは朝鮮学校を無意識に「特殊な空間」としてとらえていることがわかる。そして、その「特殊な空間」から出ていこうとしたかれらのエネルギーにのみ注目をした。それだからこそ、上述のような語りの意味を理解しようとすらしなかったのだと思う。

朝高に頻繁に通うようになって見えてきた朝高生たちの日常の姿と、今から数えると30年前の「朝鮮学校」を振り返るX家のメンバーの姿が重なりあうように思えた。1990年代のX家のメンバーの語りを再度考えるためにも、まずは、丹念に朝鮮中高級学校での日々の営みを描くことから始めなければと考えるようになっていく。

本稿は、その第一歩であり、まだ分析の初期段階であることを再度断っておきたい。

2. 調査地概要

2-1 沿革

本研究の主たる調査は中部地方にあるA朝鮮中高級学校の高級部にて行っている。ただし、中級部も同じ敷地にあり、行事は中高合同で行うことも多い。A朝鮮中高級学校(A中高)の高級部の学区は、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、長野県、富山県、石川県、福井県の8県(学区内の中級部数は5校)である。通学ができない生徒のために寄宿舎も用意されている。なお、中級部の学区は、愛知県内であり、県内にある

合計4つの初級学校からの進学がほとんどである。

A中高の沿革は以下の通りである。

1945年8月15日、日本の敗戦による朝鮮半島解放後、日本で暮らしていた朝鮮人は日本各地に「国語講習所」を建てた。これは、朝鮮語を知らない日本生まれ、日本育ちの朝鮮人の子どものための帰国準備のための朝鮮語を教える機関である。愛知県内でも同じ動きがあり、名古屋市、春日井市、小牧市、瀬戸市、一宮市、半田市、岡崎市、豊橋市などに国語講習所が設立された。1945年10月の在日朝鮮人聯盟（朝聯）の結成とともに、これらは朝鮮人小学校として発展、1948年4月20日にはA朝鮮中高級学校の前身となるC朝鮮中学校が名古屋市内で開設された。

1949年10月19日の学校閉鎖令が愛知県内の朝鮮学校にも適用され、1950年にかけて複数の朝鮮学校が閉鎖もしくは公立学校の分校にされた。そうした中でもC朝鮮中学校は自主学校として運営を続け、1953年に高級部を併設、現在の校名に改称、1961年に名古屋市近郊の現在地に移転、1973年には鉄筋5階建ての校舎を建設し、現在に至る。

愛知県知事が学校法人認可および各種学校設置認可を与えたのは1967年2月14日である。（その後、県内の全朝鮮学校が設置認可を受けた。）

2-2 教育目標

総聯がかかげる民族教育の目的は「日本で生まれ育つ同胞子女に朝鮮人としての民族自主意識と民族的素養、正しい歴史認識と現代的な科学知識を身に付けさせ、真の人間性と健康な肉体を育むことにある。言いかえると、民族性と同胞愛にもとづく仲睦まじく豊かで活力にみちた同胞社会を形成するという新世紀の要求に即して、同胞社会建設と国の統一と復興発展に貢献し、日本と国際社会でも活躍できる高い資質をもつ真の朝鮮人、有能な人材に育てることにある。」（<http://www.chongryon.com/j/edu/index2.html>）という。

A中高の目的も「学校教育法に基づき本校に入学する在日朝鮮人子女に対し、中等の普通教育を実施し、朝鮮人として必要な教養を涵養し、併せて朝日両国民の親善に寄与しうる人材を育成すること」（A中高等学校則第1条）とされている。すなわち、在日朝鮮人の子どものための「民族的自覚と幅広い学力を育み、民族の繁栄と『在日同胞社会』の発展、さらに朝日の友好親善に貢献しうる有能な人材を育成すること」を目標としているのである。そして、そのためには、「民族的

自覚と母国語を軸とした民族文化に精通すること」が必須条件だとしている。

2-3 現状

生徒数は現在、中級部が約140名、高級部が約150名で、総数300名弱である。生徒の国籍は朝鮮籍・韓国籍がほぼ半々、日本籍の生徒が2-3名在籍していることもあるが、2012年度にはいない。いわゆる4世が大半を占めている。

教員は21名（全員、朝鮮大学校卒）、職員は5名、その他非常勤講師が5名（英会話などの講師も含む）である。生徒数は最盛期には中高あわせて1500名を超えていた。卒業生も累計で1万4千余名ほどになる。生徒数の推移は非公開であるが、少子化などの自然減に加え、日朝関係の悪化、特に2002年の「拉致問題」発覚以降、いわゆる「総聯離れ」が進み、生徒数は一貫して減少し続けている。初級部、中級部の統廃合や閉校措置などを行いながら、運営を続けているが、経営状態は厳しさを増している。さらに、日本経済の悪化にともない、同胞企業からの寄付も少なくなり、財政の悪化に歯止めがかからないという。

この結果、教職員の待遇は悪く、給料の遅配が恒常的な状態となっている。また、教員確保も困難で、教員一人一人の負担は相当重い。「民族教育を支えたい」という気持ちはあっても、結婚などを契機に転職するケースも多く、教員の年齢層は20代の若い層と50代以上のベテラン層にかたよっている。20代の教員は生徒たちの寄宿舎に住むことが多く、一部教員は舎監として寮生の指導にもあたっている。

A中高の授業は、全国の朝鮮学校と同様、「日本語」以外は全て朝鮮語で行われる。国語（朝鮮語）、朝鮮歴史、朝鮮地理、現代朝鮮歴史など朝鮮学校特有の科目もあるが、その他の科目、カリキュラムは日本の公立高校とほぼ同じものである。

また、ソジョ（小組）と呼ばれる部活動も盛んである。サッカー、ラグビー、空手、バスケットボールなどの運動部、朝鮮舞踊、声楽、吹奏楽、美術などの文化部があり、ほとんどの生徒がなんらかのソジョに所属している。ともに朝鮮学校内の大会への参加のほか、日本の公式戦や日本の学校との練習試合、交流会にも参加している。また、部員数不足のため、A中高のみではチームが組めないソジョもあり（野球、ラグビーなど）、近隣の日本学校との合同チームを結成して試合に参加している。

さらに、日本の学校で「生徒会」にあたる活動も熱心に行われている。正式には在日本朝鮮青年同盟（朝青）A朝高委員会と呼ばれる。全国の朝高の生徒は高校入学と同時に朝青に加入することになり（小4から中3までは少年団）、その役員組織が朝高委員会である。高3を中心に常任委員会が構成され、委員長、副委員長、国際統一部、宣伝部、国語部、学習部、清掃部、風紀部、文化体育部などがおかれている。さらに下部組織で各学級（班とよばれる）にも同じような組織がおかれ、（教員に）指名された委員が役割を果たしている。

卒業生の進路は、朝鮮大学校に1/3、日本の大学・専門学校に1/3、その他、同胞企業や総聯の機関を含めた就職が1/3がここ数年の平均的な割合である。朝鮮大学校への進学を一定数確保したいという学校としての希望はある。しかし、その他の進路選択にも理解を示し、支援する体制も生まれている。ある保護者へのインタビューでも「大学は日本の大学へ進学させたいと思っています。だから、予備校にも通わせています。ソジョはラグビーをやっていますので、予備校のある日とも重なるんですね。で、顧問の先生に相談したら、先生は、予備校を優先させてくださいって（言った）」という。

なお、朝鮮学校と総聯、朝鮮との密接な関係については、朝鮮学校に関する歴史的なさまざまな研究書、Sonia Ryang の著作、宋の近著などに詳細に述べられているので、それらの著作にゆだねたい。学校創立当時の朝鮮の「在外公民」としての自覚の育成という側面のみならず、「この学校の子どもたちは日本で生まれて日本で死んでいくのですから」（A朝高教員）という側面——つまり日本での定住を見据えた教育内容に変更されており、1993年度で一度大きく改変、さらに2003年度から使用されている教科書（総聯傘下の学友書房による発刊）では、大きく教育内容が変更され、日本で生活していくことおよび「グローバル時代に焦点をあてた」内容に大きくシフトしたものになっているという²⁾。ただし、歴史的にみると、朝鮮学校と総聯、朝鮮との関係は切っても切れないものであり、現在でも、朝鮮学校の各種行事、民族教育に関する科目などでは、朝鮮の国旗、国歌、朝鮮での流行歌など、その関係の深さを示すものは明確に確認できる。金日成³⁾、金正日の「肖像画」は高級部の教室、職員室、校長室などには掲げられている。中級部は2002年からはずされ、宋の著作でもあるように、子

どもたちを優しく包み込むような金日成を描いた絵が各教室には飾られている。行事でも、中高合同の場合は肖像画なし、高級部のみの行事には肖像画が掲げられることが原則となっている。

3. 調査概要

数年前から、A朝鮮学園理事長（当時）とは愛知県の委員会を通じて面識はあった。したがって、学校から行事のたびに様々な案内はもらっていた。しかし、理事長以外に知っている教員や生徒、保護者もいなかったもので、「行きにくい」「入りにくい」という印象がぬぐえずに、なかなか足が向かなかった。

ところが、2010年度からはじまった「高校無償化制度」から朝鮮高校のみが排除されていることに関する学習会などに参加しはじめたことを契機に、頻繁にA中高に足を運ぶようになった。無償化適用を求める様々な活動にも加わることになり、学校関係者やオモニ（母）会（保護者会）の役員、朝高委員会の役員の生徒たちとも頻繁に顔をあわせ、話し合いの機会を持つようになった。その過程で、前述したような問題意識を持つようになった。

ただし、朝鮮学校をめぐる日本社会の視線に敏感になっている学校は「調査」に対しては警戒をしたことも事実である。したがって、入学式、卒業式、運動会、文化祭などの行事から参加をしはじめ、2010年度、2011年度の1学期は無償化問題の会議のたびに学校に足を運び、校長をはじめとする幹部教員との関係形成につとめた。そして、2011年度の夏休みに当時対外関係を担当していた教員に調査について話し、校長への依頼に協力してもらい、調査計画書を学校に提出した上で、許可を得た。基本的に週一回のペースで自由に授業・行事・休み時間・放課後の参観をしてもいい、職員室のあいた机を使用してもいい、昼食は学校の食堂を利用してもいい等の許可を得ることができた。また、運動会や文化祭の後の教員の打ち上げなどにも参加させてもらい、教員との自由な交流も実現している。また、昨年度末には特別授業として、中級部、高級部の生徒たちに授業をする機会も与えてもらった。

2012年度には校長や対外関係の教員が異動になったが、私の調査活動は引き継いでもらえ、現在も基本的には週一回のペースで参観をさせてもらっている。

さらには、初級部の行事にもできる限り参加してい

る。運動会、学芸会、夏祭りのほか、A中高の高校学区にある全初級学校4年生以上の合同合宿（ヘバラギ学院⁴⁾・福井にて2泊3日）にも参加した。初級部でどのような雰囲気で学校生活を送っているのかなどを垣間見るいい機会となった。

また、高3の6月に行われる「祖国訪問」と呼ばれる朝鮮への2週間の修学旅行への一部同行もした。在日朝鮮人⁵⁾学生と日本人とは朝鮮での受け入れ機関が異なるため、様々な交渉が必要で、かつ、私の要望は一部しか通らなかったが、それでも5泊6日の滞在中、4つのプログラムへの合流が可能となった。「祖国訪問」という朝高生活のハイライト行事に合流でき、学校と生徒が「ウリナラ」と呼ぶ朝鮮での生徒たちの様子を短時間でも観察できたことは大きな収穫であった。

ほかに、A朝鮮中高級学校に子ども通わせる保護者（全員、朝鮮学校卒業生）たち、現役の生徒、卒業生、教員へのインタビューも行っており、現在も継続中である。

4. 調査から

4-1 学校生活

朝鮮学校を訪れると、ほとんどの人が生徒たちの「明るさ」にひかれるようになるだろう。かれらの「明るさ」を支えるものは朝鮮学校が培う「朝鮮人として」の肯定的なアイデンティティであろう。

朝鮮学校が、日々の学校生活を通じて生徒たちに伝える「民族」は、ある部分で硬直性と本質主義的な側面を持ったものである。同化の波が常に押し寄せる日本社会で「民族を守ろう」とすると、ここまで頑まにならなくてはならないのかと感ずることもある。それは、それに対して少しでも違和感を感ずた者に対しては「偏狭」で「暴力的」なものに映ることがあるようだ。例えば、自分の子どもを幼稚部だけを朝鮮学校へ送り、小学校からは日本学校に入れることに決めたある保護者は、他の保護者から冷たい視線と冷たい言葉を投げかけられ続けたという。「裏切り者扱いだもんね。私には私の事情があるのに。あの視野の狭さがイヤでイヤで、もうあの世界を出ることにした！」と憤慨しながら語っていたが、それでも在日朝鮮人として朝鮮学校が持つ意味を決して否定はしない。「子どもに私が受けた教育の一部でも伝えたかった。日本人ではないし、アッパ（お父さん）みたいに韓国生まれの韓国人でもない。日本で生まれた朝鮮人のオンマ（お

母さん）をわかってもらうため、そして子どももそうなんだから、堂々と生きていくために、少しでもウリハッキョに入れたかった。上の子どもも下の子どもも、まだウリハッキョが大好きで、年に一回は行事に行って、友だちに会いたがるんよね。」と。

「自分は朝鮮人だよ」と人前で堂々と言える子どもにしたいから朝鮮学校に入れたと保護者たちは異口同音に語る。確かに、生徒たちはすがすがしいほど、すっきりと朝鮮人として生きている。日本の学校に通いながら、朝鮮人である自己を肯定しきれず、悶々とし、「遠回り」をして朝鮮人である自己を肯定するに至るという在日朝鮮人の生活史のモデルストーリーとは全く異なった経路で肯定的なアイデンティティを身につけているのだ。

朝鮮学校という空間——職員も先生も生徒もみなが同じ背景をもった在日朝鮮人——で、自分たちだけの確実なものに守られた安心感をもって朝鮮人であることを身につけているのではないだろうか。これは、1980年代の朝高時代を振り返った二人の保護者の語りにも見ることができる。

A「自分たちがいちばん強いみたい。チョゴリ着ても、いまは何かされないだろうかという怯えながら着るっていう感じがあるけど、私たちは、どんなもんだいっていうぐらいの勢いがあつた。」

B「胸、張って。」

A「誇らしく。そこにいと、もっと強くなれるっていうか。なんか、安心感でしょうね。」

以下、学校生活の中で朝鮮学校を特徴づけるものについて述べていくことにする。

●ウリマル（朝鮮語）

朝鮮学校の教育の最大の特徴は、朝鮮語による普通教育である。「日本語」を除いて、全ての科目は朝鮮語で行われ、学校生活も朝鮮語で送ることが大原則である。朝鮮語はいわば朝鮮学校の公式言語であり、掲示物、学校からの通知も全て朝鮮語である（漢字併記）。生徒たちのほとんどは、幼稚部、もしくは初級部1年生から朝鮮学校での教育を受けているので、ほぼ無理なく「バイリンガル」として成長していく。ただし、現在の生徒たち全員、いや教員も含めて、第一言語（母語）は日本語であり、発音やイントネーション、さらには朝鮮語の用法には日本語の影響が強く残っている。さらに、ある程度の「強制」がなければ、生徒たちの言語は簡単に日本語にシフトしてしま

う。学校の外に出れば、家庭生活も含めて、全て日本語なのだから。したがって、学校では、「ウリマル100%」運動を恒常的に行っている。時として、運動強化期間を設けて、集中的に、朝鮮語100%で生活することを目標とするが、朝鮮語での生活は基本中の基本のようだ。

しかし、一般的な傾向として、学年があがると日本語使用率が増える。もちろん、教員や先輩に対しては朝鮮語を使用するが、友人同士の休み時間などの会話を聞いていると、日本語の使用率は高い。ただし、あまりに日本語が多いと、どこからともなく「ウリマル!」という声が聞こえてきて、日本語で話していた生徒が会話をやめるというシーンはよく目にする。朝鮮語使用を厳しく言う友人に対して、「うぜえな!」という視線があることも事実であるが、生徒たちの心のどこかに、日本語を使うことに対する「罪悪感」も存在する。以下、私のフィールドノートからの一部である。

「中1の自習時間。生徒たちは彫刻刀を使って、鉛筆たてに思い思いのデザインをしている。生徒たちが作業をしながら、私に話しかける。朝鮮語だったり、日本語だったりするが、私の日本語にひっぱられて、自然に日本語になってしまう。一人の男子生徒がふと、国語部の女生徒に向かって『かほり先生は日本人だから日本語でもいいんだよね?』と(朝鮮語で)聞く。聞かれた生徒は、肯定できないという表情、しかし、私にも気を遣ったのか、返答しない。聞いた生徒は、独り言のようにして、『いいんだ。かほり先生は日本人だから日本語でいいんだ』と言うが、その後、しばらく私には話しかけてこなかった。」(2012年2月13日)

また、現在朝大2年生、高3当時は学生委員会の委員長をつとめた男子学生は、朝鮮語に対する意識を次のように語る。

「僕の意識が変わったのは中2の終わり、朝鮮に行く機会があつて。ソルマジ公演(旧正月迎春公演)に歌で(行った)。(朝鮮で)歌を習ってて、先生が今から歌詞を言うから、それを書きなさい。パダスギ(ディクテーション)って。それをやったら、朝鮮の人が感動してたんです。ウリマルをちゃんと聞いて、ちゃんと理解して、ちゃんと書ける。ホントにすごいって褒めてくれて。そんな時に、特別なんだって。おれらはウリハッキョでちゃんとウリマル使わないと申し訳ないと。そこから変わりましたね。

それまで、日本語ベラベラだったんです。要は言葉ではわかってたんです。ウリマルを守らなければいけないというのを。(しかし、明確に)意識として生まれたのは、それがきっかけでしたね。」

「ウリマルを守る」というのは、朝鮮学校の歴史の中でも大きな意味を持つものである。高1の教室の前には「私たちのウリマルは誰が守るのか? 日本人だろうか? 外国人だろうか? いや、ウリマルは私たちの力で私たちが守らねば」というポスターがはられている。また、中学の教室の生活目標の一つにも「ウリマルで100%生活しましょう」とあり、「日本語を使ってしまったら、なおしましょう」「ウリマルが分からないときは質問しましょう」と書かれている。また、どの教室にも「ウリマル教室」というコーナーがあり、日本語に影響されて間違いやすい朝鮮語、日本語固有表現で即座には朝鮮語におきかえにくい朝鮮語、また最近の日本語の流行表現を朝鮮語で表現する方法などポスター式で掲示されている(国語部の生徒が作成)。

これらに象徴されるように、朝鮮語教育は朝鮮学校の根幹中の根幹であるともいえる。歴史的にみても植民地時代に奪われた言葉の「回復」という側面があり、朝鮮学校の発祥を考えても植民地下で朝鮮語ができなくなった子どもたちに朝鮮語を教える「国語講習所」がその始まりだったこと、そして、現在の生徒たちの環境では、学校外の生活がすべて日本語であること、また、2世、3世、4世が中心の在日朝鮮人の家庭では言語は日本語であることを考えても、日本社会への同化の抵抗の象徴の一つとしても「ウリマル」がある。同時に、朝鮮学校の子どもたちにとっても、「朝鮮語ができること」は自分が朝鮮人であることの核心部分となっている。朝鮮語ができることが自分の「朝鮮人性」の絶対的な自信となっているようである。以下、中学までを朝鮮学校で過ごした男性の語りをみてみよう。

「あの……、出会ったときに、『私、韓国人です』でね、『民族舞踊、踊れるの?』って聞かれたこともないやろうし。『キムチ食べてんの?』(と聞かれたら、日本人である)『あんたの家はどうなんだ』っていう話だし。あの、やっぱり韓国語ができるかどうかというのがやっぱり、大きいんじゃないんですかね、うん。それができなければ、他がどんなに素晴らしかったとしても、うーん、説得力ってそんな持つんかなーって。うーん、どうしてもこういう

ことと言って、『お前はできるからそんなこと言うんだ』って言われたら、もう終わってしまうんだけど、もうホンマにそう思うんだから仕方がないでしょ？ っていう——（インタビュー：確認ですけど、実用的に云々ということじゃなくて、もっとこう、アイデンティティの核になるというか、そういったことの方が、やっぱり言葉を学ぶことの意味としても大きかった？）結局、朝鮮学校がなんで朝鮮語だけで授業するのかというと、やっぱりそこだと思うんですね。」（関係研・X14）

こうして、学校内では「ウリマルを守る」「ウリマルで生活しよう」ということが繰り返し、繰り返し伝えられ、生徒たちの内的規範となっている。朝鮮学校、総聯関係者の集まりに出席している際、その席に日本人がいると、スピーチする人は「今日は、日本の人たちもいますので、ここから先は日本語で話します。どうぞお許してください。」（朝鮮語で）と必ず前置きすることもその内的規範を示す一つの例であろう。多くの人にとって、日本語の方がしゃべりやすい、理解しやすいという現実にも関わらずである。

また、生徒たちは学校の校門を出ると、日本語に切り替える。

「（校門を出て）坂を下ったところぐらいまで朝鮮語で。誰から（日本語に）切り替えるみたいな感じで話すんです、いつも。電車までずっと（朝鮮語で）つながっちゃうと、やっぱ、周りの目とか、どっかで気にしているところもあるし。おもしろ半分で、多分、遊びで、（日本語への）切り替え誰がすとか（言う）」

生徒たちが、朝鮮語が公式言語の世界＝学校とその外の世界、つまり日本語の世界を行き来している姿をこの語りからうかがうことができるであろう。

●朝鮮地理・朝鮮歴史・現代朝鮮歴史

この3つの科目は朝鮮語とならんで、朝鮮学校の教育の基本となるものである。朝鮮地理はその名の通りであり、韓国の地理も扱うが、中心はやはり（北）朝鮮に関するものである。また、朝鮮歴史は古代から1910年（韓国併合）までを扱っている。その歴史観は朝鮮が採用しているものであり、韓国で教えられている歴史とは異なるという。朝鮮学校関係者によると、韓国での歴史教育は王朝中心であるが、朝鮮のそれは人民の視点からのものであるという。さらに現代朝鮮歴史は、朝鮮学校の歴史教育の中では最も重要な

ものである。1910年以降の植民地時代の金日成の抗日パルチザンの闘いの歴史、解放、朝鮮戦争（朝鮮では祖国解放戦争）、その後の朝鮮民主主義人民共和国建設、そしてそれに続く革命史、さらに韓国の民主化闘争、在日朝鮮人運動史などを、やはり朝鮮の歴史観に基づいて教えている。

植民地支配の歴史は、自分たちがなぜ日本にいるのかということを明確に理解させることにつながるし、金日成を中心とした抵抗と闘いの歴史は、現在まで続く日本社会からの差別への抵抗の源となるようである。こうした歴史は、歴史科目のみならず、国語（朝鮮語）の教材でもたびたび扱われる。学校の中で、生徒たちは繰り返し、日本の植民地支配について学び、自分が日本にいることの不条理を確認しつつ、それでも、朝鮮人として日本で生きていく権利を明確に意識していくように思われる。

●朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）

朝鮮学校と朝鮮との関係は深い。これは朝鮮学校の歴史に強く結びついたものである。簡単に経緯を述べておこう。

1945年の日本の敗戦後、日本各地で国語講習所から学校に発展した朝鮮学校は1948年、1949年に日本政府から閉鎖命令―警察権力による校舎からの生徒の排除という過酷な弾圧を受けた。また、1952年のサンフランシスコ講和条約で、在日朝鮮人が日本国籍を奪われた後も、朝鮮学校には認可を与えないという方法で弾圧は続いた。在日朝鮮人の抵抗で、自主学校として学校は存続したが、財政面で困難を極める中、1957年には朝鮮から「教育援助費」と「奨学金」が送られてきた。その額は、日本円で1億2千万円強、その後、毎年、送られてきており、2012年4月にも1億6560万円が送られた（『朝鮮新報』ネット版2012/4/14）。これまでに合計158回、総額469億2505万390円が送られた。第一回の教育援助費が送られてきた1957年は、朝鮮も戦争の傷跡に苦しみつつ、国家建設で決して豊かではなかった時である。その後も朝鮮が経済的には決して余裕があったわけではない。こうした中で送られてくる朝鮮からの継続的な援助金は多くの在日朝鮮人を感動させ、自分たちは日本にいらながらも「祖国」＝朝鮮に守られているのだということを経験することにつながった。そして、この事実、朝鮮学校の中で繰り返し、繰り返し、伝えられてきた。1970年代に初級学校に在籍していた保

護者は当時を振り返って次のように語った。

「(朝鮮からの教育援助費が来ていることに対して) ホントに助けてもらっていたというのを肌で感じていたから。『すごいんだ、お金、くれるんだ』みたいなこともあったから。先生たちから、いくらいくら来ましたと聞くと、私たちは、壁新聞みたいなのを作って、『ありがとうございます』って掲げてやってましたので。」

そして、この教育援助費は朝鮮学校と朝鮮との関係の正当性を説明する大きな根拠にもなってきた。日本は弾圧して朝鮮学校をつぶそうとしてきた、韓国は在日朝鮮人はいずれは日本人になるだろうと自分たちを「棄民」した、しかし、朝鮮は私たちを助けてくれた。金日成は「工場ひとつ建てられなくても日本にいる子どもたちにお金を送らなければならない」と言い、教育援助費を送り続けてくれたという話が世代を超えて語りつがれ、「祖国(＝朝鮮)には感謝してもしきれない」と現役の高校生が語るほど、朝鮮学校関係者には深く根付いている。教育援助費があったから校舎も整備できた、学校が存続し続け、今なお自分たちが学ぶことができるのだという理解をしているのである。

そして、朝鮮学校は朝鮮の「在外公民」の育成という教育内容にシフトし、教科書編成まで含めて朝鮮の力を借りようになる。現在では、先に述べたように、日本で永住することを前提にした教育内容に変わったが、それでも、朝鮮との関係を如実に示すものは簡単に確認できる。運動会などでは、「統一旗」を使った体操なども行われ、日本の運動会でも使われる万国旗の代わりに統一旗が飾られているが、朝鮮学校が支持しているのは明確に朝鮮なのである。

それに対して、生徒や保護者たちはどのように思っているのだろうか？ 1970年代に初級部での教育を受けた保護者たちは次のように言う。

「子どもの頃には(違和感は)なかったですね。高学年で「革命歴史」という(教科)ができた、金日成さんの小さな時から、どんなふうに育ったかいうのを習って。それだけを掲げている教室もあって、赤いベルベットの生地がひいてあって。銅像がかかげてあって、その教室の前を通るときには必ず頭を下げなければいけないとか。今は変だなあとありますが、当時はそれが当たり前で、尊敬もしていたし、ありがたいと思っていたんですね。」

そして、このような教育がどのような形で個人にあらわれるかを次のように語ってくれた。

「結局、小学校の時から、思想教育がずっと入ってるじゃないですか。それが、何らためらうことなく、それが普通だったんですけど、ことあるごとに共和国のほうから、何か物を送ってくれたということもあるし。で、中3のときに、初めて、(朝鮮舞踊の)経験者の先生が来てくれて、そういうのを題材にして踊りを作って。そのときに踊るのと同時に、そういった思想教育も受けて。踊ってるときに、感情も高ぶってくるし、感極まるわけですよ。今も忘れられないんですけど、踊りながら、向こうに金日成の顔が浮かんで、それで涙流しながら、踊ってる自分がいたんですね。すごいな一つて思っ。踊りが終わったら、アー、みんな、疲れたね一つて日本語で喋ったり、普通なんですよ。普通なんですけど、踊ってる瞬間は、みんな、その世界に入り込んでいるんですよ。私って変なのかなって、思ったんだけど、一緒に踊ってた同級生、みんな泣いているから、みんな同じ気持ちなんだと思って。そのときは、日本に住んでる私たちのために、北の方から、スリョンニム(首領)がいるから、私たちが在日で日本の中で今も生きていけるんだよ、みたいな教育を受けてて、それを題材にした踊りだったんですけど。ありがとねーみたいな感じで、乗ってた自分がいる。(笑) ホントに、笑っちゃうんですけど。」

そして、現在はいく少し「冷静に」朝鮮のことを見ているつもりだが、中3の時に踊りながら泣いた自分はそのまま残っていると語る。

「(泣いた自分は) 今も残ってるし、今も子どものころ習ってた「ナラ～ エソ～」(朝鮮から教育援助費が送られてきたことを歌った歌)⁶⁾って歌、あの歌、自分で歌いながら泣いちゃう。それは取れないと思う。」

他の保護者たちも、個別の体験は異なるが、ほとんど同じようなことを語る。当時は学校の言うことが全て正しいと思っていたし、朝鮮のおかげで自分たちはこうして学ぶことができる、その意味で朝鮮＝祖国に感謝している、今になってみると、おかしいなあと思うことは多いけれど、それでも教育の根底に流れていたものは自分の中に根付いている。盲目的には従うつもりはないが、金日成への尊敬や感謝の念は今でも変わらない。日本人からみたらおかしいと思うかもしれないけれど、この根底にあるものは変えようもないし、生前の金日成の姿をみると自然に涙がでてる自

分たちがいる、韓国にも行くようになったが「海外旅行」として、楽しみに行くところ、朝鮮とは全く意味が異なるという具合だ。

では、生徒たち自身はどう考えているのだろうか？ A中高をして1年目の夏休み、二人の朝大生に行ったインタビューから抜き出してみる。

「(朝鮮の一員だという自覚はあるの？) やっぱり歴史が、ウリハッキョの歴史が、教育援助費から始まってるので、そういう面では、本当に感謝してもしきれないって言うか、自分が習えるところが存在すること自体がウリナラのおかげなので、それは本当にそういうことを踏まえたなら、本当にウリナラの一員として見てもらってることはすごいことだなあと思います。それで、自分もその一員としての自尊心はありますし。(でも、同時に日本社会の一員だって自覚も、あるの？) あります。ウリナラに行ったら、やっぱりまた、目線が変わるっていうか、ホントに歓迎してくれるんですよ。日本に対しての愛着もありますし、ずっと生まれてから、生まれた所もそうですし、育ってきたところも日本ですし、でも、ウリナラは自分の国だし。(朝鮮に対する日本の報道はどう思っているの？) まず、何を信じていいかわからないのが一つ。今は、ウリナラに行ってから、足を運んでから、いろいろ経験したら、ちょっと分別を持てるけど、やっぱり小さい頃はそのまま受け取るから。だから、オモニにたぶん聞いたことがあると思いますね。『これって、どういうこと？』っていう感じ。オモニは、『そのニュースが本当かどうかはわからないから、全部が全部、信じていいわけじゃないよ』みたいな。」

「ボくら、実物(朝鮮)を見てるんで、要は、雑音だったり、いろんな情報が違うけど、そう思うだろうなっていう部分は、実際、あるっちゃあ、あるんで。(日本の報道を) 全否定ではなくて、ただ、それを違う、違うだけじゃなくて、そういう意見があるけども、これはこういう意図があって、こうこうで、みたいな、そういう自分なりの見解は(ある)。(学校での教育は) 基本、いい部分だけを入れるんで、いい部分はいい部分で。だけど、それだけじゃないだろうし、その裏で何があるのか分かんないですけど。でも(良い部分だけを) 教えないと、どんどんマイナスイメージが増えてきますから、この日本では。そうなっちゃうのは当たり前で、当然なんです。」

現役の高校生たちにはストレートにしたことがないが、フィールドノートから知見を構成してみよう。

昨年12月、金正日の死去にともない、年末に総聯愛知県本部の主催で追悼式典が行われた。私にも案内のFAXがきた。立場上、出席するか否かを迷ったが、色々な経緯から参加することにした。その場に思いがけず多くのA中高の生徒たちが参列していた。

「出席者は知った顔が多い。挨拶は交わすが皆神妙な顔をしている。中高の生徒たちにもたくさん会う。普段は私をみると、からかいの言葉を投げかけたり、だきついてくる生徒たちも、ニコリともせず、頭を下げるだけ。こちらが戸惑うほどだ。式典終了後に顔を合わせた生徒たちも同じだ。考えてみると、この子たちが学校に通い始めた時の指導者はすでに金正日だ。これまで保護者のインタビューで語ってもらった金日成に対する思いと似たような感情が生徒たちにもあるのだろうか。」(2011年12月29日)

さらに、今年4月15日、金日成生誕100周年の祝賀祭が日本各地でも行われた。愛知はA中高のグラウンドを使って、県内の総聯関係者が一堂に会し、式典と様々な出し物、そして女性同盟各支部が売店を出し、お祭りムードに包まれていた。A中高の学生たちもその祝賀祭には参加、歌を歌ったり、朝鮮舞踊を披露したりしていた。4月にはいって、生徒たちは校舎内もそのお祝いのための装飾品を各クラスで作っていた。その時の様子について。

「生徒たちは昼休みと自習時間を使って、ポスターを作っている。宣伝部の女生徒の指示を受けて、男子生徒も一生懸命紙で花を作っている。中心になっている生徒たちがポスターに何を書くか、真剣にかつ楽しげに話し合っている。書く言葉は『金日成首領 100歳おめでとうございます』に決まったようだが、それをどうデザインするかがなかなか決まらない。生徒たちを見ていると、ごく自然にこの祝典の準備にむかっているように見える。私にはなかなか理解しがたいところだ。この子たちは、本当にお祝いの気持ちをもっているのだろうか、また、基本的に行事好きで、みんなで何かをやるのが好きなこの子たち……そのひとつとして捉えているのだろうか。その両方だろうか。見ていると、両方だというのが実感。」(2012年4月13日)

また、生徒たちの一部は高校卒業までに2-3回訪朝する。前述のソルマジ(迎春)公演や高2の学生代表

による訪朝団（1ヶ月ほど全国の朝高生代表と訪朝し、研修、討論を重ねてくる。翌年の朝高委員会の常任役員候補であり、その後、朝大に進み、在日朝鮮人社会に貢献する意識をもたせることが目的だという）、さらに芸術部門で活躍したい生徒は、平壤音楽舞踊大学の通信教育を3年間受け、夏休み期間中、朝鮮での現地指導を受けに行く。（朝高卒業時に同大学の通信課程の卒業証書も取得できることになっている。）そして、高3の6月、全員対象で2週間の「祖国訪問」がある。ほとんどの生徒にとっては初訪朝となる。生徒たちは、今は空路平壤に入り、朝鮮の海外同胞局の指導員に案内されながら、2週間、平壤市内、白頭山や板門店などを訪問する。幼稚園、初級部時代から、繰り返し聞いてきた「ウリナラ」を直接見て、聞いて、体験する貴重な機会となる。

本年6月、一部のプログラムに同行させてもらったが、生徒たちが平壤に着いて1週間後の合流だったので、すでに生徒たちは少し変わって見えた。通常の学校生活では、だらしなくみえる一部生徒たちが、指示に従って行動している、授業中はムダ話をしている生徒たちが参観地では真剣な顔をして解説を聴いている。途中、生徒たちに感想を聞いたところ、「朝鮮、すごいと思う。来てみてわかった」「みんながとても優しくしてくれる。祖国の人が色々してくれるからありがたいと思う」などと語った。生徒たちは、まだ言語化できていなかったが、生徒たちと行動を共にしていると、確かに平壤で温かく迎え入れられ、現地の人と交流していることがわかった。もちろん、日本の生活と比較すると不便は多く、「住むのは日本がいいんですが、でも、朝鮮も来てよかった。」と語っていたが、最終日、空港で、2週間ついてくれた指導員、医師、看護師たちと別れを惜しみ、抱き合い、涙を流して、いつまでも手をふっていた生徒たちの姿が印象的である。

保護者にも「祖国訪問」から戻ってきた子どもは少し違ってみえたようだ。

「(帰宅して)『ウリナラ、いいよ』って言っていた。帰ってきて(最初の)言葉が『俺、ウリナラのためにハンモム パッチ(身をささげる)⁷⁾しちゃうかな』だった。(朝鮮で)考えて帰ってきた。この前まで朝鮮、嫌いって言っていたのに。みんなどこ行くのも楽しいから、そういうの大好き少年だから、(朝鮮に)行くのは楽しみにしていた。行って帰ってきて、どういう考えになるのかなと

思ったら、最初にそういう言葉を言ったから。『それってどこまでチャラけてるの?』って聞いたら、『俺、ホントにそう思っとるよ』って言ったから。」
卒業生たちは、この祖国訪問をもう少し言語化して語ってくれた。

「ウリナラで過ごしたら、すごい、すごい変わるんですね、みんな。やっぱり自分の民族の中で暮らしてから、いつもなんかすごい、どっちかというグレてる子たちも、ちゃんと並べよみたいな感じの声、かけてたりとか、すごいびっくりすることが多かったんですよ。すごいびっくりしてから、自覚を持って、みんな。ウリナラで過ごすことによって、チョソンサラムとしての自尊心っていうか。そういうのをちょっとずつでも、持ち始めてるんだろいうあっているのを感じ始めて。(私：それ、ウリナラに行ったから、みんな、そうなんだろか?)もちろん、それは機会になるんですよ。たぶん。実際に見るのと、聞くのでは違うと……。日本に帰ったら、弛んじゃうってのもあるんですけど……。 (ウリナラでは) 締まってて、すごくびっくりしましたね。それを見てから、そういう機会を作ってくれるウリハッキョっていうのは重要だなんというのを思ったし、チョソンサラムとして生きていくなかで、ウリハッキョがホントに大切な存在だと思った。」

「ホントに、こういうウリナラ行った体験のことを聞かれて、いっつも言うんですけど、伝わんないと思うんですけど。違うんです。なんか。着いた瞬間、わかるんです。空気が。違う。ここが祖国だって。わかる。感じる。あっちの人たちの対応だったり、空気っていうか。ホント、特別。あれは行かなきゃわかんない。(日本人の私でも感じるのか?) どうなんですかね。基本、あっちの人はアットホームだし、なんかありゃあ、歌おう、そういう、ワイワイしたがるんで。ボクだけじゃなくて、全体にあってると思いますよ。基本、オレら、騒ぐの好きなんで。だから、中2のとき(に初めて訪朝してから、みんなに『お前ら、なんか機会あったら、絶対、行け』って。)

このように生徒たちにとって、朝鮮は日本社会が想像する以上に「身近」な存在でもある。もちろん、日本の朝鮮に対する報道も見ているし、朝鮮で学ぶことが全てだとは思っていないとも語る(中には朝鮮での説明をそのまま受け入れている生徒も少数ではあるが

いる)。しかし、朝鮮で限られた人ではあっても、現地の人々に温かく受け入れられ（親族がいる生徒は親族にも会い）、朝鮮語が通じ、姉妹校の同年代の生徒たちと同じ歌を歌い、女生徒は制服のチマチョゴリをなんの躊躇もなく着られるという2週間の経験は、生徒たちに変化をもたらす経験とはなるようだ。日本に戻って1週間くらいは、「またウリナラへ行きたい」と語り続け、気持ちのどこかを平壤にしているような生徒たちである。ただ、現実の生活に戻るのも早く、その後はあまり朝鮮のことは語らなくなる。しかし、この祖国訪問を機会に、進路を朝大へと決める生徒も少なくなく、2週間の訪朝が自分のアイデンティティを確認する場となる側面も大きいといえよう。

●行事：「みんなで集まって騒ぐ、大好きですから！」

A中高には行事が多い。学校内・外、対内（在日朝鮮人コミュニティ）・外等、形式や規模も様々ではあるが、頻繁に行事をしている。生徒たちは初級部時代から「個人は全体のために、全体は個人のために」という「集団主義」を身につけるための教育を受けている（宋、2012）ので、行事となると、その成果をめいっぱい発揮しているように思われる。個別には「めんどうだ」と思っている生徒もいるが、その生徒まで含めて、行事の時には「団結」して行事にとりくんでいる姿が確認できる。集団の一員として、集団の中に溶け込まなければ（または、溶け込んでいるようにみせなければ）ならない雰囲気、リーダー格の生徒たちを中心に作り上げられる。例えば、秋の大運動会の直前の午後、中高の生徒が全員グラウンドに集合して「気合いをいれる集会」を開くことが恒例行事になっている。昨年も今年も同じ光景が繰り広げられた。以下、フィールドノートから。

「昼休みを終えて、生徒たちは再びグラウンドへ。全員で円をつくる。××（朝高委員会の生徒）が円の中心にたち、声をはりあげる。『A中高のみんな！』残りの生徒たちは「オー！」と答える。それにつづいて、××が「運動会を成功させるぞ！」と言うと、それに呼応して、「成功させるぞ！ 成功させるぞ！ 成功させるぞ！」とこぶしをあげながら叫ぶ。この「儀式」が1時間半続いた。円の中心に出る生徒たちは、出身初級学校別、寄宿舎生たち、ソジョ別、学年別など、次々と変わる。延々と同じ事が繰り返されたが、生徒たちは本当に楽しそうだ。いつも、私にこっそり『学校きらい』とか

『この学校のノリがいやだ』と話してくれる○○（名前）はどうしているだろうか？と探してみる。円の中にいた。気のせいかな、笑い顔は少しひきつっているように見えるが、でも、声をはりあげ、右手のこぶしをふりあげている。」

一緒にみていた先生に『このノリが嫌いな子、いないんですかね？』と聞いてみた。先生は『そりゃ、いますよ、当然。でも、郷にいれば……で、ここにいたらやらざるを得ないんです。そういう風にこの子たちは育っている。』とのこと。

終了後、校長室に寄って、校長と雑談。『生徒たち、大騒ぎですね。』と私。校長は『うん、運動会まで士気を保たないといけないからね。あれも大事なことなんだよ。』（2012年10月4日）

学校は、行事を通じて、生徒たちの「団結心」を育成することをねらっている。生徒たちが一丸になって、行事にとりくみ、一体感を形成するのだ。そして、その関係を生涯通じて維持させようという気持ちをもたせ、卒業も学校ひいては総聯との関係を維持させることを期待しているのだ。

●日本社会との関係

宋は朝鮮学校の特徴に「分離主義」をあげている。つまり、日本社会の中で日本人と朝鮮人の間に民族的「分離」を確保しつつ、朝鮮学校という空間で、朝鮮人の教員によって、朝鮮語で、朝鮮人に育て上げられると指摘した。確かに、朝鮮学校では「ウリ」（私たち）という境界を形成し、朝鮮学校内部の者とそうでない者とを明確に分離する。「ウリキリ」（私たちだけ）という表現も多用され、抑圧的な日本社会から解放する「当たり前、朝鮮人であることができる」空間＝朝鮮学校を守っていこうという力にもつながってきた。「民族の自立性」さらには「民族の自決権」という言葉も、朝鮮学校の幹部教員から頻繁に聞かれる。雑談の中で聞くことが多いのだが、こうした言葉を聞くと、日本人である私を拒絶しているように感じるときさえあるほどである。（そうした言葉が発せられる背景は理解しているつもりであっても。）興味深いことに、日本学校出身の総聯専任職員に対してもこの分離作用が働くことがある。朝鮮学校も、生徒数にしても、同胞社会からの支援にしても、自分たち（まさに、ウリキリ）で維持存続が可能であった。

しかしながら、朝鮮学校をとりまく状況が厳しくなっていく中で、朝鮮学校が日本社会との関係形成を

志向せざるを得ない状況になってきている。もちろん、JR 定期券の学割適用、インターハイ出場資格、大学受験資格など権利獲得運動では、日本人とともに運動に参加してきた。2010年度からの高校無償化排除問題でも、日本人との関係形成は志向されている。それに加えて、日常的なレベルで日本社会への積極的な参加がアピールされるようになってきている。たとえば、講演会でのA中高の前校長の発言にも次のようなものがあった。

「私たちが在日同胞が、日本の地域社会に積極的に出て行き、私たちの存在と活動について正確に説明し、理解を深めていただく必要があるでしょう。とりわけ、朝鮮学校は学校が所在する地域社会の支持と理解が必要です。」

そして、2005年に愛知県で行われた「愛・地球博」に生徒全員がボランティア（通訳ボランティア）で参加したこと、毎年8月に行われる「にほんど真ん中祭り」への参加経験、そして、公開授業や懇談会など交流活動が年間20回以上に及んでいること強調したのである。（2011年12月14日）

生徒たち自身も、愛知県内の私学高校の連合体が毎年行う「私学フェスティバル」「愛知サマーセミナー」などにも参加、ハングル講座、朝鮮伝統芸能講座などを出している。また、11月の文化祭に日本の高校生の参加要請も行い、ここ数年、それが実現している。その他、A朝高学生委員会と生徒会との交流会開催、舞踊部や声楽部が地域のお祭りやイベントへの参加、体育会系のソジョも試合や合同練習などを通じて交流をはかっている。

ただし、このような活動をしながらも、日本人への「対抗意識のようなもの」は常にあるという。ある年のA高学生委員会常任委員、国際統一部長（対外事業を行う部）は、日本の高校の生徒会交流に参加した時の経験を次のように話してくれた。

「日本の高校生とつきあいなかったですから。僕は正直、（日本の生徒に対して）フン！ っていう気持ちがあったんです。日本の高校生、何にも考えていないだろうって。僕らは、朝鮮人として歴史も文化も政治も考えるし、もっと言えば、祖国の統一とか、愛国・愛族ってことをいつも考えている。日本の高校生は、チャラチャラしているだけだろう。そんなんと一緒に何かやれるのかって思っていました。」

また、もっと日常的なレベルでも「日本人に負けな

い」という思いがあると言う。映画『パッチギ！』等、小説も含めて朝鮮高校を描いた作品には、日本人とのケンカが必ずと言っていいほど登場する。これは誇張でもなく、確かにある時代までは、ケンカは日常茶飯事だったようである。しかし、次第に表立ったケンカはなくなっていく。その理由は、1980年代から全国ではじまった「模範班」運動すなわち模範クラスに選ばれれば、朝鮮に行くことができるという運動が生まれ、クラスあげてその運動に取り組んでいったこと、そして、さらに1990年代からのインターハイ等公式戦への出場資格を獲得したことがあげられるという。ケンカが公になれば、公式戦への出場資格が停止されるからだ。このような動きの中で朝鮮学校の生徒たちは「おとなしく」なっていったという。

しかし、A中高の卒業生でもあり、現在、A中高の教員をやっている男性は語る。

「でも、僕は今の子どもたちがふがいない。たまに集団下校で一緒に電車に乗ったりすると、日本学校の生徒に気合いで負けている感じる。僕らの頃は、僕は運動部だからケンカはできないけれど、帰宅部の連中が『朝鮮学校の威厳を守る会』っていうのを作って、バカにされたら、ちゃんと戦っていましたよ。まあ、こっちが一方的に因縁つけたこともあると思いますけどね。やっぱり、日本人には負けられないでしょ。」

生徒たちの本音は、日本人とは交流しつつも負けられないといったところだろうか。ところで、学校として公的には交流行事を重ねているが、生徒たちの私的な交友関係に日本人はほとんど含まれない。アルバイトで日本人とつきあいがある程度である⁸⁾。さらに、保護者、現任教員へのインタビューでも、日本人との関係はほとんどないことが語られた⁹⁾。

4-2 保護者たち

A中高の行事に参加すると、保護者たちのパワーに圧倒されることがある。運動会の入場行進、文化祭の舞台、その他集会などで生徒たちが壇上にあがると、保護者たちが生徒の名前を呼ぶ。自分の子どもだけではない。生徒たちは幼稚部、初級部から朝鮮学校に通っているのだから、保護者たちは生徒たちを幼少期から知っているのだ。これが、対外的な行事になると、保護者たちは大応援団となる。

冒頭で述べたように、現役のA中高の保護者たちは、ほとんどが朝鮮学校の出身者である。出身高校は

全国であるが、東京の朝大卒業生も多く、また、卒業後の一時期は多くが朝鮮学校の教員や総聯やその参加団体の職員経験者である。そのせいか、オモニ（母親）会——学校の保護者会——の集まりやイベントに行くと、年上には〇〇（名前）オンニ（姉さん）、同級か年下には名前（呼び捨て）で呼び合い、お互いの関係の近さを感じさせる。父親も朝鮮学校の出身者がほとんどで、出会いを尋ねると、学校時代か総聯の行事や仕事を通じて出会い、結婚というケースが多い。このような場にいると、韓が指摘する「朝鮮学校コミュニティ」が確かに存在していることを確認できる（韓、2006）。

現在の保護者にとっては、子どもを朝鮮学校に送ることは「当然のことだった」「日本学校はわからないので、選択肢も何もない」「全く悩むことない」ことだった。中島も大阪の朝鮮学校保護者へのインタビューから同様の結果を導き出している（中島、2011）。

しかし、日本の対朝関係の悪化にともない、朝鮮に関するネガティブな情報が飛び込んでくるようになっている。そうしたことに保護者たちは影響されないのだろうか？ また、朝鮮学校の現状が厳しい中、子どもたちの（物理的な）教育環境・施設は決して良いとは言えない。また、それを改善できる可能性も少ない。さらに、朝鮮学校が日本社会で正当には評価されていないという現状の中で、子どもの進路について、親たちはどう考えているのだろうか？ インタビュー記録から抜き出してみよう。

「（日本社会の朝鮮に対するまなざしは）考えますね。だけど、今だからこそ、日本学校に行かせる意味があるのかなって。そういう条件的なことを言えば、日本学校に行かせるほうが、親はよっぽど楽だし。なんですけど、じゃあ、その子の人間形成上、日本学校に行くことがこの子どもたちにとって良いことなのかってなると、そこらへんは日本学校では絶対教われないものをウリハッキョは教えてくれるし。やっぱり、朝鮮人としてっていう、そこですね。いくら日本人になろうとしても、私たちは日本人になれないし、だったらもっと堂々と朝鮮人として、生きる道、そっちを選ばせてあげたいというか、そっちを進んでほしい。それを教えてくれるのは学校しかないし。（家庭だけでは限界が）あると思いますね。そこに仲間がいるというのがね、大きいし。」

「それ（日本の報道と学校での教育のズレ）は自

分で感じればいいから。家でも日本のマスコミがそういうことを悪くいったときに、そこまで悪く言われると腹が立つし、でも、面白い国だよ、変な国だよ、って普通に話してみたり。それを、あの学校に入れることは、思想教育をしてるということが分かってるから、そういう道に彼らが行くんだ、それが正しいんだと感じたら、正しいって行けばいいって。全然、行けばいいし。自分で考えて、おかしいなあと思ったら、他に選択肢いろいろあるから、考えればいいし。それこそ、次男は先生になりたいから……『でも、先生になるっていうこと自体、そういう教育をきちんとできる人が先生にならなきゃあいけないんじゃないの』っていうふうに言ったら『その部分で、俺はすごい葛藤してる』らしいです、いまは。『そういう教育はしたくないんだけど、朝鮮人として、子どもたちと関わりたいし、朝鮮人を育ててあげたいというのはある』って言ってました。」

「あの学校に入れるということは、思想教育もオプションでついてくるってこと。でも、朝鮮人であることを教える、それがゼロの日本学校と、どっちを選ぶかって言われたら、思想教育もついてくるウリハッキョを選ぶ。私もだんなも、子どもの頃から、もっとすごい思想教育を受けてきた。でも、この社会でちゃんと生きていける。子どもの頃から、独島（竹島）もウリタン（私たちの領土）だって習ってきた。そういう学校に子どもを入れているから、そこに通っている間、子どもはそこで教えられることをちゃんと勉強してくれればいい。そのまま学校のことを信じてもいいし、おかしいと思ったら、自分で考えて、生きていけばいいやって。」

「私は、（卒業後の進路は）その子次第だと思ってるんですよ。日本の学校に行って、みんなが立派な場所に就職できるのかって言ったら、そうじゃないじゃないですか。朝鮮学校も人数が少ない分だけ、もっともっと低い確率になるのは当たり前のことだし、そのなかで一人二人は飛びぬけて、すごいねって言われる子も出てくるわけだし。なんで、その子次第かな。悲しいことに朝鮮学校を卒業した親が、朝鮮学校だからダメだって、日本学校に送るのが、私はすごく悲しいんです。それを学校のせいにするところが。学校のせいでは絶対ないと、私は思うんです。日本の学校の子たちも、ほとんどが塾に行ってるわけじゃないですか。学校ですべて補って

るわけじゃないですよ。自分の身内でも、いま商売で大きくやってる人なんですけど、自分が朝鮮学校に通ったことを失敗だと思ってるんですね。だから、子どもたちにも同じ失敗をさせたくないって。」

つまり、保護者たちは、思想的な部分、対朝鮮観などは、子どもたちが成長の過程で自らが判断することだと考えているのである。学校を通じて教えられる朝鮮、高3の「祖国訪問」などで子どもたち自身が学び取る朝鮮への見方と日本のマスコミなどで流される朝鮮に関するネガティブな情報、それらを総合的に判断する力を子どもたちは持っているのだという。日本社会が朝鮮学校の政治性をいかに批判しようとも、親として最も重視するのは、子どもが朝鮮人として育っていくこと、朝鮮人同士のつながりをもつことだと強調する。

また、朝鮮学校の不十分なところは認めつつも、それが日本学校に行ったからといって解消されるものではないことも分かっている。卒業後の進路まで含めて、むしろ、今の方が自分たちの時代と比較したら、子どもたちの選択肢は増えていると語る。自分たちの頃は夢はあっても実現するとは思っていなかった、道は組織、学校、朝銀、または同胞企業か親の会社で働く、女性ならば適当な年齢になったら同胞と結婚するのだという程度のことしか描けなかったが、今の子どもたちはもっと自由だ、それを実現させるかどうかは本人の努力次第だと。また、ある母親は明確に「学歴なんかどうでもいいと思っている。それよりも朝大まで行って、朝鮮人コミュニティの中でしっかりと人間関係をつくってほしい。学部、勉強は二の次。朝高までだと、地域内の朝鮮人コミュニティしか知らないが、朝大まで行けば全国に広がるから」と言い切るのである。

もちろん、学校運営に全く不満がないわけではない。いや、むしろ、相当ある。日本の学校の保護者と変わらない。しかし、朝鮮学校を守りたい、支えたいという気持ちは強く、それはオモニ会の活動によく表れている。もちろん、通常の活動は会費（子ども一人あたり年間7000円）によって支えられているが、学校のために、機会があれば収益になるような活動を展開している。運動会での売店（チヂミなど朝鮮料理）、文化祭でのバザーと韓国からの（！）物品販売（コリアングッズ販売）などが主たる収益活動である。年度末に学校にまとまった金額を寄付することが恒例となっている。その他、オモニ会レベルでも日本学校の

PTA との交流をしようと、愛知県内私学学校の父母懇親会（父母懇）の「緑学区」を拠点として活動をしている。朝鮮料理教室の開催などをして対面的な関係を形成、高校無償化適用のための署名の依頼なども積極的に展開する。時としては、要請活動（国、自治体）にも出向き、朝鮮学校の現状を訴えるなど、実に活発である。

こうした活動は、朝鮮学校のいわば伝統とも言えるようである。地域は異なるが、1970年代から80年代にかけて4人の子どもを朝鮮学校に送った保護者は次のように語った。

「(学校には) お金がないから、バザーなんか（やるとなれば、参加した）。(また、) 子どもが4人いてたら、いろんな役員もさせられますしね——。(それまでは総聯や学校との関係は) もう、全然(ない)。学校も初めて、自分の子どもが行って、初めて行きましたし。あのね、はたで（見ているだけの）分からない時は、ぱっと（表だけ）見たら、文句（も出る）。規模は小さいし、学校は小さいし、頼りないし。(しかし) やっぱり批判する前に、自分が子ども入れると一生懸命良くしていかなあかんということになりますから。それで、私たちの学校は、親も子どもも、一生懸命、一緒にして大きくなるとあかんと思いましたし。ほんで、子どもがやっぱり明るいですしね。で、先生はすごく一生懸命ということだけは、誰にも負けない、いう感じだから、良かったな思いますね。」(関係研・X2)

この雰囲気はA中高で今でも残っているし、朝鮮学校関係者の話を総合すると全国の朝鮮学校すべてに共通する雰囲気のようなのだ。

5. まとめにかえて

以上、参与観察を通して見えてきたA中高の教育の営みを記述してみた。生徒たちを「朝鮮人にしていく」様々なものがある。朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理、現代朝鮮歴史などの「民族科目」を基盤にしつつ、朝鮮の価値観を教えつつ、祖国は朝鮮であり、自分たちは祖国の一員なのだという意識を持たせていく。さらに、朝鮮語ができるという自信に加え、幼少期から朝鮮舞踊や朝鮮の歌、朝鮮の楽器に触れる機会も多く、日常的に朝鮮人に囲まれて成長していくという経験は、生徒たちに「自分は朝鮮人なのだ」という肯定的なアイデンティティを培うようである。

興味深いのは、朝鮮学校を経験していない親も子ど

もの朝鮮学校通学を通じて、「朝鮮人」としての民族意識を獲得していったという点である。

「(小さい頃の体験の中で、自分が朝鮮民族だということで、低く感じるとさっきおっしゃいましたね。それがだんだん変わってきて、朝鮮民族として、今生きてるんだと、子どももそういうふうになればいいというふうに段々なってきた(のには)、何かあるんですかね?) 子どもたちが民族学校行きますわね。そしたら、民族学校行くと、日本の教育が、朝鮮を植民地にしててね、歴史教えたりするのが正確じゃなかったから、自分なりに、朝鮮民族はそういうふうにしっかりしてないからこういうふうになった、いう感じで。それは、何でもかいうたら、やっぱりその、きちんとした歴史を(教えずに)、日本人の都合のいいね、教え方をされたいうことは(わかってきた)。子どもたちが民族学校行きますわね。そしたら、民族学校行くと、とくにそういうことは力を入れて教えるわけでしょ。ほんで、民族学校行って、自分たちがきっちりその中へ入りますわね。そこは民族のことばかりだから、ま、いろいろ子どもたちも見ることできるし。だから、私たちはけっして劣っているのじゃなくて、たまたま生活が不安定で(劣悪な生活環境に置かれたり)、そういうように教育が(歪んだ教えをしたり)、親も教育受けてなくて(その結果、自分自身を卑下して見るようになった)。なんかそういうようなことをきっちり覚えると、ちっとも劣りもしない、全くいっしょやし、優秀な人は優秀だし、何も劣ることはないんだということをはっきり分かりましたね。」(関係研・X2)

今よりも露骨な差別があった時代に学齢期を過ごし、結婚後、義父の意向で、子ども4人を朝鮮学校に入れた、そのことに戸惑いはあったというが、子どもが学校に通う過程で、親が変わっていったことが読み取れる語りである。

さらに、日本政府からの過酷な弾圧にも負けずに1世たちの手によって朝鮮学校が建てられたことに対する感謝、そして2世たちによってその学校が維持され、3世、4世の自分たちが今学ぶ場所があることに感謝するという物語も学校の中では繰り返される。実際に、1世たちがお金のみならず、手作りで校舎を作ったという話は民族関係研究会で在日朝鮮人の生活史を聞いているときにも何度か出てきた。さらに2世たち(今の保護者の親世代)で、自営業等で成功した

人たちが巨額の寄付¹⁰⁾を学校にした、当時から給料が十分に出なかった教員たちを常に家に招いて食事をさせたなどの話もあちらこちらで聞いた話である。それらの話は、感謝の物語であると同時に常に日本社会への抵抗のシンボルでもあるのだ。日本は朝鮮学校のために何もしない、むしろ弾圧しかしてこなかった、したがって朝鮮学校は私たちが(ウリキリ)で守り続けるのだという意識は世代を超えて受け継がれている。

こうした中で、生徒たちは強い仲間意識(朝鮮学校コミュニティ)を持つようになり、また、保護者たちも朝鮮学校に通う生徒たちを学齢期前から知っていて、非常に親密な関係の中で12年(またはそれ以上)を過ごすことになる。おそらく、一部の生徒にとっては煩わしく、息苦しい側面もあるだろう¹¹⁾が、多くの生徒たちにとっては「守られた空間=安全な家」(Safe home)の中で、朝鮮人であることを否定される経験もなく成長していくのだろう。

A中高の運動会のメイン競技に男子生徒全員による組み体操がある。8段組で一番上に乗った生徒によって垂れ幕が下ろされる。そこには「継承と団結」とある。まさに、この言葉に象徴される営みがA中高の教育なのであろう。

注

- 1) 在日韓国・朝鮮人社会において家族・親族の結合が強く、かつ非常に重要な準拠集団になっていることに注目し、家族・親族をユニットとした生活史調査。4親族57名の生活史をとり、『民族関係における結合と分離』(谷富夫編著、ミネルヴァ書房、2000年)として出版されている。また、2009年からフォローアップを実施している。このプロジェクトでのデータは「関係研・対象者番号」で示している。
- 2) A中高の校長からの教示(2011年度)。
- 3) 朝鮮学校関係者は朝鮮の指導者を呼び捨てで呼ばれるのをとてもいやがることは承知している。ただ、本稿ではインタビュー記録以外は敬称をつけないで記す。
- 4) 地方の朝鮮学校の生徒数は全校で20名前後のところが多い。したがって、同級生も2-3人、もしくははいないということが多々ある。このヘバラギ学院は普段仲間が少ない学校生活を送る児童に、多くの仲間がいることを実感させ、朝高で一緒に学ぼうという意識を育むことにねらいがあった。200名ほどの児童が集まり、通常の学校生活では人数が少なすぎてできない騎馬戦などをやって楽しいひとときを過ごしていた。
- 5) 本稿では外国人登録の国籍にかかわらず、在日朝鮮

- 人として統一する。ただし、民族関係研究会での研究について記すときは「在日韓国・朝鮮人」とする。
- 6) この歌は日本で作られ、朝鮮学校で歌われてきた。内容は「海をこえて祖国からお金が送られてきた。首領の愛は山や海にたとえようもないほど大きい」というものである。
- 7) 한몸 바치겠습니다 (この身を捧げます) という総聯社会ではよく使われる表現が元にある。朝鮮語と日本語をまぜた表現は朝鮮学校の中ではよくみられる。
- 8) 学校に違和感を感じ、学校外での生活に楽しみを見いだしている一部生徒には親しい日本人の友人がいるという。「ビジュアル系のバンドが好きで、そこのライブで知り合った子たちと遊んだり……。正直、その子たちという方が楽。学校のノリは嫌い。」と語る。
- 9) もちろん、朝鮮学校を出て、日本社会に参入しつつも、子どもを朝鮮学校に送る保護者も多いことは承知している。その場合は、日本人との親しい関係は形成されているだろう。本報告までにインタビューをした保護者の中には、日本人とのつきあいは、仕事上もしくは近隣関係のみに限られていた。
- 10) 千万円単位から億単位の寄付をした人もいるそう。
- 11) 何人かの生徒が電車の中で学校での息苦しさを語ってくれた。学校の雰囲気違和感を感じ、「朝鮮も大嫌い！」と語る。また、政治学習をする「学習班」に誘われても「全力で断りました」と言う。しかし、そんな生徒も日朝間の摩擦がおこり、通学路で言いがかりをつけられると、猛然と抗議している姿をみた。

参考文献

- ウリハッキョをつづる会, 2001『朝鮮学校ってどんなところ?』社会評論社
- 小熊英二・姜尚中編著, 2008『在日1世の記憶』集英社新書
- 小沢有作, 1973『在日朝鮮人教育論——歴史編』亜紀書房
- 金泰泳, 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて

- 在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
- 金漢一, 2005『朝鮮学校の青春——ボクらが暴力的だったわけ』光文社
- 京都大学教育学部比較教育学研究室, 1990『在日韓国・朝鮮人の民族意識——日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』明石書店
- 高全恵星監修, 2007(柏崎千賀子訳)『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社
- 権肅寅, 2007『帰属とアイデンティティの分化と統合』伊藤重人・韓敬九編著『中心と周縁からみた日韓社会』慶應義塾大学出版会
- 宋基燦, 2012『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店
- 谷富夫編著, 2000『民族関係の結合と分離』ミネルヴァ書房
- 曹慶鎬, 2011『在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察』『移民政策研究』移民政策学会
- 中島智子編, 1998『多文化教育——多様性のための教育学』明石書店
- , 2011『朝鮮学校保護者の学校選択理由——『安心できる居場所』『当たり前』を求めて』『プール学院大学研究紀要』第51号
- 朴三石, 1997『日本の中の朝鮮学校』朝鮮青年社
- , 2011『教育を受ける権利と朝鮮学校——高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社
- 韓東賢, 2006『チマチョゴリ制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎
- Ryang, Sonia, 1997 *North Koreans in Japan: Language, Ideology and Identity*, Boulder, Co: Westview Press.

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「朝鮮学校における『民族』の形成・継承・変容のメカニズム」(研究代表・山本かほり)による研究成果の一部である。